

福井はここ！
京都に近いから、
歴史上かなり重要な
土地だったのよ。



画像：心月寺蔵（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館提供）
朝倉氏は但馬国（兵庫県養父市）の豪族で、南北朝時代、越前守護・斯波氏に従って越前に入る。後に斯波氏に代わり越前国守護となる（正式には守護代）。義景は5代目で最後の当主。織田信長に滅され、後に越前国は柴田勝家が統治。

武田信玄
(1521-1573)

信濃



画像：神戸市立博物館蔵

織田氏は越前織田庄の庄官の出身。斯波氏の被官となり、斯波氏が尾張守護を兼ねると守護代として転出した。信長は尾張守護代織田氏の三奉行の家柄だったが、武力で尾張を統一した。

斎藤龍興
(1548-1573)

美濃

朝倉義景
(1533-1573)

越前

浅井長政
(1545-1573)

若狭

画像：長浜市立博物館蔵

浅井氏は近江国守護京極氏の被官だったが、浅井亮政（市の夫である浅井長政の祖父）のとき京極氏に謀反を起こし近江湖北を武力で支配。



織田信長
(1533-1582)

尾張

徳川家康
(1543-1616)

三河

六角承禎
(1521-1598)

足利義昭
(1537-1597)

三好党

摂津

山城

朝倉氏と周辺大名

信長が最も恐れた朝倉氏

天下に名を馳せ朝倉一族の繁栄の基礎を築いた朝倉氏初代・孝景は、越前守護の斯波氏の家臣でしたが、1467年に始まった応仁の乱を機に、越前の支配権を獲得。初代孝景の末子である宗滴の活躍で3代貞景のときに一向一揆を制圧し、北陸はもちろん近国にも影響力のある有力な大名となりました。一方、織田信長の家は、斯波氏の分国・尾張の守護代織田家の家臣の家柄でした。朝倉家と織田家。名声や格では、朝倉家が上でしたが、世は下克上、信長は力で支配を強めていったのです。

1567年、將軍の座を狙う足利義秋（後に改名して義昭となる）が5代義景の協力を求めてきました。応じない義景に代わって義昭が頼ったのは信長でした。信長は義昭を連れて京都へ。義昭は望みを叶え、信長は天下統一へ大きく踏み出します。信長に匹敵する力をもっていた朝倉氏。信長にとって最強のライバルだったのです。

その後、傀儡將軍となった義昭は、再び義景を頼ります。これを察知した信長は、1569年、義昭の御教書を送り義景に上洛を迫りましたが、義景は拒否。幼少より帝王学を学び、名家意識が強い義景は、「信長の下風に立つこと」は、堪えられなかったようです。以来、信長と義景の敵対関係は決定的なものとなり、激しい戦いを重ねた末、1573年8月、義景は大野市六坊賢松寺で自刃。一乗谷の城下町は、信長の軍勢によって焼き払われ地中深く眠りについたのでした。



上から望む「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡」。5代103年にわたり越前の中心として栄えた「京にも勝る文化都市」。

家紋で探る

朝倉氏のルーツ

家紋が武家で広まったのは、平安末期、源氏と平家の争いが激化する中、敵味方の区別を付けやすくしたことに始まると言われます。

朝倉氏の家紋は「三盛木瓜」。朝倉氏のルーツは但馬日下部氏族であり、同氏の家紋も「三盛木瓜」です。家紋については、源平合戦で功名をあげた際、源頼朝から、元の木瓜一つの家紋に二つの木瓜をそえた「三ツ盛り木瓜」をもらったことに由来するという説もあります。

「木瓜」は織田信長の家紋（織田木瓜）としても有名です。また、浅井氏の家紋は「三盛亀甲花菱紋」で、亀甲の中に描かれた「花菱」は、朝倉氏の「三盛木瓜」や「織田木瓜」の中にも見られますが、家紋からみれば朝倉・織田・浅井の関係は、史料がなく明らかではありません。なお、浅井長政の妻・市の家紋は、実家である織田家の家紋を使用していました。女性の実家の家柄が高ければ高いほど、女紋といわれる実家の紋を使用していたようです。一方、市の娘・江三姉妹の三女の家紋はといえば、その位牌には、天皇家の八葉菊、徳川家の三つ葵、豊臣家の五三桐が刻まれています。



朝倉家（三盛木瓜）



右から織田家、浅井家、徳川家の家紋